

宇宙の果てまで

加納愛子

鹿児島県・七〇・主婦

深い青空を眺めていると、ふっと雲のあい間から、あなたのお顔が見えかくれしたような。

ハツとなったところに、あなたからの懐かしいお便りが届いたのでした。何年ぶりでしょう。しばらくは封筒を抱きしめて、胸の高鳴りを抑えたのでした。年甲斐もなく動揺しております。

お便りによりますと、今はお一人ぐらしとのこと、お淋しさ、お察し申し上げます。思えば四〇年前、恢復見込みのない病母を看病しての帰り道、疲れと悲嘆の余り涙した私を温かく優しいお言葉で慰めて下さり、更に涙したことを、まるで昨日のことのように覚えております。荒い位はげしいあなたのご気性の中に秘めたデリケートなお優しさに、私は強く引かれてしまったのでした。が、周囲の誤解を恐れ私はあなたから遠ざかったのです。然し何もなかった筈なのに、何故、年甲斐もなく私は動揺

するのでしよう。私達は生まれた時から何か引き合うものがあつたのですね。

でも、勇を鼓して申します。今の私は、いいえこれからもどうにも身動きが取れません。お許し下さい。私とて名残りの人生は一分一秒も惜しく、切なくなつてまいります。

思いは乱れるばかりの今宵も月明かりの中で月見草がしょんぼり、うなだれ、私の心情が移ったかのように涙が溢れます。でも夜空を見上げれば、天の川をはさみ、彥星と織姫はいつも兩岸から見つめ合うだけで、星の涙を散らしているのです。結ばれないのは私達だけではないのですね。

美術館で名画を鑑賞したり、桜ふぶきの名園で、あなたは悲恋の武将と姫様のお話をして下さったり、美しい思い出ばかり、振り返ると心は浄化されます。この世で思いを果たせなくてもあなたと私の心の火花は鮮かな光となって、あの宇宙の果てまで清らかに永久に舞ってゆくでしょうと信じています。

でも、私は切ない！ お会いしたい！ さよなら